

2015年10月24日

ドイツ メルキッシェ・アルゲマイネ新聞



画家・寺田琳近影、ラーテノウのアトリエにて

撮影：マーコス・クニーベラー

## 世界を結ぶ仲介者

画家・寺田琳は、芸術の持つ「結びつける力」を信じている。  
西と東との交流を図るクリエイティブなアイデアは  
ラーテノウにあるアトリエで生まれた。

マーコス・クニーベラー記者

ラーテノウ。そもそも寺田琳とはいったい何者なのか？2009年からラーテノウに暮らし、それからというもの数々の展覧会や芸術活動によって、ラーテノウ市における文化的生活を豊かにしてきたこの日本生まれの画家については、しばらく情報が途絶えていた。無理もない、というのも、寺田琳は長い間この町を離れていたからだ。遠くへ。約一年半の間、彼は日本の一都市である大田市に滞在し、そこで古い製菓工場の建物をミュージアムへと造り替えていた。ラーテノウと南日本の間には地理的にはかなり距離があるとはいえ、内容面からみれば寺田は決して遠くへ行ってしまったわけではない。彼は、自らの67年の人生を賭して五年前にハーフェルランド地区で開始した取り組みを、故郷でも続けているだけなのだ。それは、東洋と西洋の文化交流であり、日本ドイツ間で芸術の縁を繋ぎ、深め、世界を取り持つ活動である。

現在もパラセルス通りに巨大なアトリエを構える寺田がラーテノウで気づいたのは、極東に位置する自らの故郷とドイツを結ぶ文化交流が、いかに可能性に満ちたものであるかとい

うことだ。彼は文化会館にて自らの作品を展示するだけでなく、日本人アーティストの作品を集めた二つの大きな展覧会も行っている。また寺田が架け橋となり、ラーテノウ芸術協会の芸術家たちは2014年の夏、東京で作品を展示する機会を得た。2011年の大津波によって寺田の生まれ故郷である仙台周辺が壊滅的な被害を受けたとき、彼は被災者のために大規模な募金活動を行った。そしてその二年後、今度はハーフェルランド地区の一部をエルベ川の氾濫が襲った際には、被災者を支援すべく自らの作品を競売にかけた。こうした芸術活動なども含む一連の社会的功績が讃えられ、寺田はラーテノウ市から文化勲章を授与された。

このような男がこっそり姿を消すのは容易なことではないし、寺田自身もそんなことは望んではない。数日前から彼はドイツに舞い戻り、じっくりと創作に取り組むべく、時間が許す限りラーテノウのアトリエに籠っている。寺田特有の、金箔や銀箔で純化された — あるいは昇華されたと言うべきかもしれないが — 作品群は、彼の人となりを実に示すように、新たな創造的推進力に満ち溢れている。

ただし、自らの創作活動に割ける時間は限られている。寺田は来年、世界のアートシーンにおいて重要な位置を占め、名実ともに最大のアートメッセのひとつであるベルリナーリステにて、日本人アーティストたちを紹介する予定だ。メッセ終了後、彼らの作品の一部がラーテノウにやってくることを期待しよう。寺田が、遙かなる東洋と西洋をハーフェルランドで引き合わせるのには、決して初めてではないのだから。

---

### 寺田琳略歴

画家・寺田琳、1948年青森生まれ。2000年渡独、その後2009年にラーテノウに移住。パラセルスス通りに構えたアトリエにて、創造力の迸るがままに芸術活動に勤しんでいる。寺田作品の内では、伝統的な日本画の素材と現代アートの手法が見事に一体化し調和している。

2011年、津波被災者への募金活動などを通して多くのラーテノウ市民にその名が知られるようになる。

2013年夏、エルベ川氾濫の被災者支援のため自らの作品を競売にかける。

同年、ラーテノウ市より文化勲章を授与される。

日本人アーティストの作品を扱う二つの大きな展覧会をラーテノウにて開催した。

記事執筆：マーコス・クニーベラー

日本語訳：井上春樹